



共生と協働を学ぶ教育が すべての人を幸せへと導く

Global Citizenship Advice & Research 代表 リヒテルズ直子

一人ひとり異なる個性を持つ人々が一緒に暮らす社会において、共生・協働の考え方は必要不可欠です。人口減少が進む日本では、その視点を重視した社会づくりが進められつつありますが、コロナ禍は、社会は人々が協力し合って築かれるものであり、市民の有り様が社会の安心・安全を左右するのだと、改めて認識する機会となりました。

共生・協働が日常化する社会では、互いのよさを理解し、認め合うことが土台となります。それを築くためには、まず自分がどのような人間であるかを知ることが大切です。自分を理解できれば、他者の強みや弱みも認められるようになるからです。子どもの個性を認めて伸ばす教育は、学校という集団があってこそ実現します。他者と一緒に学び、喜怒哀楽を分かち合いながら、自分1人ではできないものを創り上げたり、問題を解決したりする経験を幼少期から積み重ねていくことで、他者の思いに自然と共感し、協働できるようになるのではないのでしょうか。

そうした学校教育の実現の鍵は、教員研修にあると考えます。OECDの報告書*にあるように、日本の教員の指導力向上は自助努力に委ねられている部分が多いと感じます。国や自治体が掲げる教育を先生方が具現化できるような指導法を学ぶための時間と費用を、すべての教員に保障する仕組みが必要でしょう。また、オランダで普及しているイェナプラン教育では、異年齢のグループで学習や学校行事などを行います。それは子ども同士の学び合いや協働が自然に生まれるようにするためです。そうした学びの仕組みの構築にも目を向けるべきでしょう。

地域学習も一層力を入れたい教育活動です。地域の文化を知り、特色や問題に触れることで生活に根差した学びができますし、ほかの国や地域との違いに目を向け、理解し、認めることにつながります。新学習指導要領で示された「社会に開かれた教育課程」にも合致する方向性です。

社会を変えるのは教育です。社会の一員である私たち市民が、今ある問題を直視し、次の時代をどのような社会にしたいのかを語り合っ、未来へのビジョンを持つことが重要だと考えます。

多様な民族が暮らすヨーロッパでは、個に応じた教育が根づく一方で、共生・協働への道を今も模索し続けています。高齢化が進み、外国人労働者の受け入れの加速化が予測される日本でも、ヨーロッパが抱える問題に早晚、直面するでしょう。その未来の社会を生きる子どもたちに、共生・協働を育む教育がなされることを願ってやみません。



リヒテルズ・なおこ

九州大学大学院博士課程修了。専攻分野は比較教育学・社会学。マレーシア、ケニア、コスタリカ、ボリビアで暮らした後、1996年からオランダ在住。オランダの教育と社会事情を自主研究し、著作・論考・講演等を通じて日本に伝えている。著書に、『今こそ日本の学校に！ イェナプラン実践ガイドブック』（教育開発研究所）、『手のひらの五円玉 私がいェナプランと出会うまで』（ほんの木）等。

* OECD（経済協力開発機構）が実施した「国際教員指導環境調査（TALIS）2018 報告書」による。